

頼三樹三郎漢詩研究—頼山陽との比較を視座として—
(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D172239

氏名：任萌萌

本論文は、従来の研究を踏まえながら、頼三樹三郎の漢詩を細かに読解した上で、同じ中国の古典あるいは日本の古典を引用している頼山陽の著作との比較を通して、頼三樹三郎漢詩の特徴をできる限り具体的に示そうと試みたものである。頼三樹三郎の漢詩に影響を与えた頼山陽との比較を視座として、頼三樹三郎の漢詩の中に見られる押韻、対句の構成、表現技方、言葉と典故の使い方、中国詩文の受容などについて確認した。また、頼三樹三郎は頼山陽の漢詩を模倣することで、頼山陽の漢詩の中に特有の表現が伝承されていることを明らかにすることを目的とした。

本論文は序章と終章を含めて六章から構成され、各章ごとに得られた結論としては以下のようになる。

序章では、頼三樹三郎は幕末志士として思想の方面において頼山陽から多大な影響を受けただけでなく、漢詩人として文学の方面においても頼山陽と似ている点があると考えられる。頼三樹三郎の漢詩、文章、書簡、略伝及び先行研究を整理した上で、その漢詩が文学的鑑賞に十分に堪え得るものであるにもかかわらず、『一日百印百詩』以外にほとんど研究が進んでいない研究現状を指摘した。今まで研究されていなかった蒲生重章編『鴨厓集』の成立経緯と成立時期を究明した後、その書物を頼三樹三郎漢詩研究の対象に加えた。頼三樹三郎の漢詩と頼山陽の漢詩には具体的にどのような関わりがあるのかを研究目的として考察を進めた。

第一章では、頼三樹三郎の詩には、いかに頼山陽のことを慕っていることがわかるかについての分析を行った。頼三樹三郎は自筆写本『雑詠』に諸家の詩集を手写し、その中で頼山陽の詩数が総数の半分以上を占めることから、頼三樹三郎は幼いころから頼山陽の詩を手本として勉強したことがあると考えられる。それに、頼三樹三郎は頼山陽が生前に好んでいた『平家物語』の典拠を用いて作った詩があり、それらの詩には日本の典故と中国の典故を同時に活用していることを究明した。後藤松陰の塾に行った時と帰京した後、頼山陽の知人と親戚たちと寄り合って、その独特の詩作の場において、父への思い出を託している応酬の詩を多く作った。東北漫遊の時期、頼山陽の知人たちの家を訪問し、目にした頼山陽の詩に和する次韻詩を吟じた。これらの詩には対句の構成、修辞の表現技法及び用いられている典故と言葉までも頼山陽の詩に模倣していることを明らかになった。しかしながら、頼三樹三郎は詩に自分の境遇と気持ちを素直に表現するので、独自の詩作であると言える。頼三樹三郎は生前の頼山陽から直接薫陶を受けることが少なかったが、頼山陽と関わりのある人々と付き合い、頼山陽の詩作を熟読し、頼山陽のことを心にかけていると思われる。

第二章では、頼三樹三郎の詠史詩は、頼山陽から影響を受けたことを明らかとなった。頼三樹三郎の詩には頼山陽の詩と同じ主旨のものがある。これらの詩には頼山陽の詩の言葉、

用いられる典故、表現技法を運用して、吟じた詠史詩がある。頼三樹三郎の詠史詩には他の文人の詩作に見られない頼山陽の詩に特有の表現を用いていることを解明した。日本の歴史を詠じる詩には、頼三樹三郎も頼山陽も日本の典故を用いているだけでなく、中国の典故も自由自在に使っていることを考察した。日本の典故と中国の典故を埋め込んで自己の観点を表す表現手法は和と漢の人情が同じという和漢同情の思想に基づくものであると考えられる。それに加えて、和歌が詠み込まれる頼三樹三郎の詠史詩には頼山陽の詩と同じ和歌を踏まえて詠じたものがあると指摘した。このような日本的な表現のある詩は中国詩の模倣から日本の美意識や風土文化に合わせて発展した日本的な詩である。頼三樹三郎の詠史詩には、日本史の題材だけではなく、中国史の題材の詩を取り上げていることを考察した。頼三樹三郎は日本史と中国史の題材を同時に重視していると考えられる。「詠清初諸子係明遺民者（清初諸子明の遺民に係る者を詠ず）」という詠史詩の連作は、忠節を尽くした中国明末の遺民を対象として詠じたものである。全部で9人が取り上げられており、その中の7人は『山陽先生書後』中の人物である。頼三樹三郎は清朝に仕えなかった遺民を好んで取り上げて詠っているのは幕末維新の動乱の時期に生きて、遺民たちに親近感を持つからであることを指摘し、それ以外に、頼山陽『山陽先生書後』の影響を受けたことも要因の一つであると結論づけた。

第三章では、頼三樹三郎の詩と『唐絶新選』の関わりについて分析した。『唐絶新選』は頼山陽が文化7年（1810）菅茶山の廉塾にいた時、選抄した選集である。それが出版された時、頼三樹三郎は後叙を書いた。後序と、その自序と例言と比較して解説することによって、頼三樹三郎は後序の中で示している自己の詩学観を究明した。頼三樹三郎と頼山陽は、唐詩の絶句が佳い詩体であり、真実性がありかつ韻律の整っている詩が良く、繊細な詩風を排除し、勁拔な詩風を好むなど、そこには共通な詩学観がある。頼三樹三郎は『唐絶新選』の後叙に示している詩学観通りに自分の詩を創作したものと考えられる。当時の頼三樹三郎の視点から見れば、頼山陽は平易を重んじる立場に立って、唐詩の絶句を選んだのである。平易な詩風は白居易の特徴である。『唐絶新選』では、『唐詩選』には載せていない中・晩唐の詩人、白居易の詩が選ばれている。頼三樹三郎の詩には、いくつかの白居易の模倣作がある。頼三樹三郎の詩には、白居易の受容が見られる。それらの詩は日常生活の中の興味を穏やかに詠じたものであり、江戸後期詩壇の白居易の詩の受容相の一種に属している。頼三樹三郎の詩では白居易への理解がますます深くなり、言葉の引用に止まらず、白居易に共感してその感情を詩に詠み込むものが見られる。頼三樹三郎は詩に真情の吐露することを重視するようになることを窺い知ることができる。頼三樹三郎詩における白居易の受容は江戸詩壇の白居易受容史において重要な位置を占めていると思われる。それに、白居易の影響を

受けた詩の詩体は全て七言絶句である。『唐絶新選』に選ばれている詩はすべて七言絶句である。文政元年（1818）年、頼山陽は手抄本白居易の詩を耽読している記録が残っている。頼三樹三郎は白居易の詩に関心を寄せたのは、江戸後期詩壇その時代背景の影響以外に、頼山陽とその『唐絶新選』は契機を作るからであると考えられる。

第四章では、頼三樹三郎の詩の「狂」字を含む言葉を使って自分自身のことを形容する用例に絞って分析することを通して、「狂」字の用法を明らかとなった。頼三樹三郎は「古狂生」を用いて自称し、「狂」字を含む言葉はしばしば詩に使われている。頼三樹三郎の詩のうち、本文に「狂」字を含むものは18首あり、そのうち過半数を占めるのは自分自身のことを形容するものである。また、頼山陽の詩にも「狂」字を含むものがある。頼山陽の人生は「狂」に始まり、「狂」に終わったと言われる。両者は積極的に自分自身のことを「狂」と呼ぶのは時代背景と関わりがあるからである。当時、陽明心学と文人意識の影響のもとで、当時に「狂」ブームが現れた。そして、両者の詩の「狂」字の用法を比較することを通して、詩の中に活用している典故の異同を確認した。両者の詩には杜甫の受容が見られる。その一方、杜牧のことを典故とする場合の使い方が異なる。頼三樹三郎の詩の「狂夫」は「罪言」を作った杜牧であり、頼山陽の詩の「狂夫」は豪遊する杜牧である。それは両者の生きる時代が違うからであると考えられる。頼三樹三郎「大風雨」詩は頼山陽の「大風行」詩を踏まえて作った詩作であると論証し、頼三樹三郎の詩は頼山陽の影響を受けたことを明らかとなった。

終章では、論文全体を総括した上で残された課題をあげ、今後の研究の展望を概説した。

以上のように、本論文では、頼三樹三郎の漢詩を取り上げ、中国の詩文との比較研究のもとで詩の内容を解説し、その上で頼山陽の漢詩と比較検討した。頼三樹三郎の漢詩は頼山陽の漢詩と深く関わりがあることを詳細に明らかとなった。頼三樹三郎の漢詩と頼山陽の漢詩を比較することは、頼山陽の漢詩が幕末漢詩壇への影響を明らかにする一環として価値がある。頼三樹三郎の詩の形は古今を兼ね、調は唐でも宋でも無く、和漢の典故を合わせ、風雅に議論を託すと言える。江戸後期漢詩壇において重要な位置を占めると考えられる。